カキ養殖におけるクロダイの食害

岡山県では東部海域を中心にカキ養殖業が営まれ、2021 年度の生産量は全国３位となっています。本県の海域は、島しょ部の静穏域が多く、三大河川をはじめ陸域から豊富な栄養塩が供給され、餌となる植物プランクトンも発生しやすいのが特徴です。春に「種付け」と呼ばれる稚ガキを海に吊す作業（以下、「本垂下」という。）が行われ、その年の秋から冬には出荷を迎える「一年かき」の生産が主体となっています。

近年、養殖現場で春の本垂下時にクロダイによる食害（写真１、２）が多く聞かれるようになりました。従来からカキ筏周辺では馴染みのある魚で、カキを食べることは知られていましたが、以前より被害が激化しているようです。この原因については、魚価の低下と漁獲圧の減少による資源量の増加、海水温上昇の影響、海域の貧栄養化に伴う餌生物の減少など諸説ありますが、明確な理由は明らかでありません。

クロダイの食害は、カキのサイズが小さい春に、先行して本垂下した筏に集中するため、生産者が歩調を合わせ、本垂下を同時期に行うことや、垂下したカキを密集させて内側のカキを守る束ね垂下（写真３）が実施されています。これらは他県でも取り組まれており、各地で本種の食害が顕在化していることを窺わせます。また、昨年の９月には本県で先進県の取組内容を紹介する学習会が開催され、カキ養殖関係者で対策の情報共有が図られました。

今回、クロダイの食害を紹介しましたが、カキだけでなくノリ養殖業でも大きな問題となっています。この背景には、資源量が安定している一方、食文化や市場価値の変化に伴う漁獲対象としての魅力の低下が拍車を掛けている可能性もあります。私自身、子供の頃から食卓で塩焼きや刺身で美味しく食べており、子供との釣りでもターゲットとして楽しんでいます（写真４）。利活用可能な魚種であり、魚食普及や利用促進の観点も含めクロダイとの上手な付き合い方を思案しているところです。

（海面・内水面増殖研究室：山下）

写真１　カキを捕食するクロダイ

写真２　食害を受けたカキの状況

写真３　束ね垂下の様子

写真４　クロダイ釣りを楽しむ子供